

「いちご」販売情報

1. 東京都中央卸売市場取扱実績

(1) いちご類

月	旬	入荷量 (t)	価格 (円/kg)	前年対比 (%)		主産地構成比 (%)
				数量	単価	
10	上旬	4	3154	59.2	119.6	北海道 (80.4) 長野 (12.3) 青森 (4.0) 宮城 (1.8)
	中旬	5	3702	64.7	117.0	北海道 (62.8) 栃木 (18.7) 青森 (6.7) 長野 (6.7)
	下旬	12	4460	82.6	116.8	栃木 (57.3) 北海道 (19.9) 静岡 (7.4) 茨城 (7.1)
10月実績		21	4057	72.9	119.5	北海道 (40.3) 栃木 (38.6) 長野 (5.2) 静岡 (4.7)
11	上旬	63	3060	98.8	97.8	栃木 (81.9) 茨城 (7.7) 静岡 (4.5) 北海道 (4.1)
	中旬	113	2428	60.6	110.6	栃木 (79.3) 茨城 (10.4) 静岡 (5.8) 福岡 (2.3)
	下旬	284	2478	68.2	122.3	栃木 (67.9) 茨城 (10.2) 福岡 (9.7) 静岡 (7.2)
11月実績		460	2546	69.0	116.8	栃木 (72.7) 茨城 (9.9) 福岡 (6.5) 静岡 (6.5)
12	上旬	531	2450	78.7	126.0	栃木 (60.0) 福岡 (12.6) 茨城 (9.3) 静岡 (6.3)
	中旬	1082	2421	122.1	107.6	栃木 (51.5) 福岡 (15.5) 茨城 (8.6) 静岡 (7.4)
	下旬	1007	2444	124.2	94.3	栃木 (52.5) 福岡 (11.7) 静岡 (11.7) 茨城 (10.6)
12月実績		2620	2436	110.5	106.8	栃木 (53.6) 福岡 (13.5) 茨城 (9.5) 静岡 (8.9)
1	上旬	1270	1794	100.0	93.2	栃木 (46.1) 福岡 (15.1) 茨城 (11.9) 静岡 (9.9)
	中旬	1359	1644	96.7	102.9	栃木 (49.9) 茨城 (12.0) 福岡 (10.3) 静岡 (9.0)
	下旬					栃木 (54.4) 茨城 (12.0) 福岡 (10.8) 静岡 (7.8)
1月実績						栃木 (48.8) 福岡 (12.4) 茨城 (10.5) 静岡 (8.8)

2. 販売状況

ア. 今年産は夏場の高温の影響を受けて各産地の生育は例年よりも遅れた。10月の出荷量は、生育が例年通りとなった昨年と比べると少なく、価格帯は高値相場で推移した。数量は少なかったものの、末端売価が非常に高い影響から、末端の荷動きは非常に鈍く、各販売先は売価を下げるため逆ザヤでの販売で展開していった。業務階級に関しても、数量が少ないことから高値での販売になった。栃木県産などの出荷は下旬には100甲ほどの出荷となったが昨年よりも非常に少なく。京浜市場においては、A品1000円/P前後での販売で推移した。

イ. 11月に入るも、引き続き各産地の出荷は多くはないが、高値の影響で末端の荷動きが鈍く厳しい販売となった。中旬より相場500円/p前後の価格帯まで下げて売り込んだことで、イチゴの末端消費が徐々に動き出してきた。一方、競合品目の柿、リンゴ、みかんについては、いちご同様に夏場の影響を受けて不作。そのため出回り少なく、高値での販売となり、いちごよりも荷動きは鈍い状況となった為、量販店はいちご等をメインに売場を広げて果実全般の荷動き改善を図った。しかし下旬に入ってもイチゴの数量が増えてこないことから、各販売先で欠品が増え始めた。

ウ. 12月に入り、いちご全般の入荷は引続き増えてこず、例年であれば相場下げて売り込むが、数量不足だったため、高値のまま相場推移。一方で本年産は、栃木県がとちおとめから大玉果形のとちあいかに半分近く品種移行した。その影響から業務階級（小玉）が不足。例年よりも早い12月上旬からクリスマス需要が出始める動きとなった。中旬に入ると更にクリスマス向け業務の注文が増え、業務階級中心の出荷に変わっていったが小さい玉が出てこず、全国的に業務階級不足となった（特に小玉）。本年産は先述した主産地の品種変更や夏場高温による出荷の出遅れで業務需要期に大玉サイズしか無かったため、業務階級の出荷量が減少した。特にM玉が非常に少なく、相場についても高騰。最終的にはL 1300円、M 1500円での高値販売となった。高値の影響から注文をキャンセルする業者や、大玉サイズを切って使用するなど、厳しい販売環境も見受けられた。その中、量販向け大玉サイズは12月中旬より各産地遅れていた分が増え始めた。売場も広がっていなかったことから、荷動きも一気に詰まり、在庫滞留しながらの販売となった。下旬に入り、年末向けの販売に切り替わったが、各産地出荷ピークを見込んでいたため、相場下げて売込をかけていった。増量はしたものの、年末に寒波の影響で九州産中心に数量が減少。不足感のある販売となった。

エ. 1月に入り、年末年始の需要も終わったことから、価格帯を落としての販売となった。上旬は売り込んだこともあり、順調な荷動きで推移した。中旬についても引続き、売込をかけたが、第1果房と第2果房の端境や生育遅れの影響により各産地数量が計画よりも増えてこない状況となり、不足感が続いた。下旬に入るも全国的な寒波により生育が停滞、引続き増えてこず、各社足りない状況が続いた。